

西伊豆町における ESD の取り組み

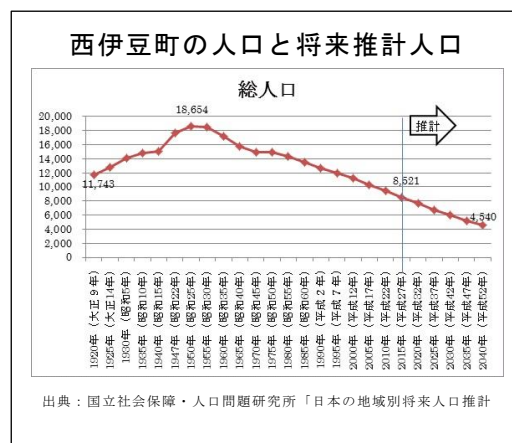
長島 司

地域創生の実現における構造的な課題

静岡県賀茂郡西伊豆町は、東側が急峻な山並みの天城連山、西側は駿河湾に接しており、美しい自然景観、豊富な自然資源を活かした観光業を基幹産業としながら、一次産業、二次産業との有機的連携を図ってきた。

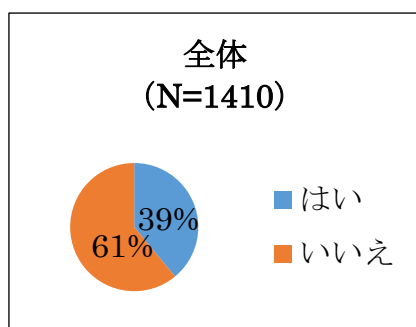
しかしながら、一次産業、二次産業においては小規模経営が多く、安定的な収入が得られないことから、後継者不足、従事者の高齢化、規模の零細化が進んでいる。また、三次産業においても旅行形態の変化、観光ニーズの多様化などにより、観光交流客数が減少するとともに、売上不振が続いており、地域経済の縮小が進み、人口減少に拍車をかけている。

1920年以降の西伊豆町の人口を見ると、戦後の18,000人台をピークとして減少を続け、近年では毎年約200人ずつ減少している。少子高齢化による自然減に加え、進学により町を離れた若者が、安定した職を求め地元に戻らないなど、若年層の流出がその大きな要因となっているが、この状況に変化はなく今後も引き続き人口減少が続くものと推測される。



「地元に残りたい」は 39%

賀茂地域（伊豆半島南部の1市5町）の小学校、中学校、高等学校の最高学年の児童生徒1,410人を対象に、静岡県が実施したアンケート調査では、「今から15年後、あなたは賀茂地域に住んでいたいですか。」という問いに対し、全体で61%が「いいえ」と回答



し、「賀茂地域に住んでいたい」が過半数を割るという結果が出ている。中でも義務教育期間が終了し、最初の進路を選択することになる中学3年生の7割が「賀茂地域に住んでたくない」と回答しており、更に人口減少が加速することが予想される。

賀茂地域に住んでいたい理由は「地域（地元）を愛している」「豊かな自然が気に入っている」「地元で働きたいなどの意見が多い。一方で賀茂地域に住んでたくない理由は、「やりたい仕事や夢の実現のため」

「外の世界への憧れ」という若さゆえの前向きなもの、「交通機関や店が少ない不便さへの不満」や「仕事不足や災害への不安」という2つのタイプに分類される。

地元に住みたくないという子どもたちを将来的に地元で生活したい、西伊豆町に住み続けたいという意識に変えさせるためには、町民一人ひとりが地元を愛する心を育む教育の担い手となり、ESDを地域全体で取り組んでいくことが必要である。このため、西伊豆町では2016年11月に立教大学ESD研究所と「ESD研究連携に関する覚書」を締結させていただき、2017年度から本格的にESDによる地域創生に取り組み始めたところである。

町ぐるみで取り組むESD

伊豆半島の西海岸、駿河湾に面した地区（旧戸田村、旧土肥町、西伊豆町及び松崎町）を通称「西豆（さいず）」と呼び、中高一貫校の松崎高校、松崎中学校、西伊豆中学校及び賀茂中学校では「西豆の子は西豆で育てる」を合言葉に「西豆学」に取り組んでいる。こうした動きをESDにより地域全体で更に加速させるため、



2017年7月、各団体の代表者など150人を集めて、立教大学ESD研究所長の阿部教授による講演会「持続可能な地域づくりと人づくり」を開催した。参加者のアンケートでは、

- ・ 都会に出たいという憧れもわかりますが、地域だからこそその良さに目を向けたいと思いました。（20代）
- ・ 地域の創生のためには“誇りの回復”が必要である。大人と子供がそれぞれの立場から学び合い、“つながり”を実感できる機会、場を設定し、活動を工夫していくことが大切。（50代）
- ・ 西伊豆町に対して“あれもない”“あれもできない”など、マイナス面ばかり目を向けていたことを反省しました。未来に向けて、地元愛、地域愛を持って生活して行きたいと思います。（60代）
- ・ 地域創生の課題を解決するために、ESDが有効であるとわかり、これを取り入れた西伊豆町の将来は明るいのではないかと思います。（町外者）

というコメントが寄せられ、多くの町民にESDに関する理解を深めることができたと感じている。

ESD 推進委員会の設立

2017年、持続可能な社会の構築を目指すため、行政・民間・NPOなどの各代表者の他、町内の中学生、高校生も委員として参加する「西伊豆町ESD推進委員会」を設立した。

この委員会は、各団体のアクションプランを示す「ESD推進計画書」を策定するとともに、会議において定期的に検証しながら、事業を推進していくことを目的としている。9月に開催した第



1回目の会議では、各団体の代表者からこれまでに取り組んできた事業について発表しながら、今後ESDに関する連携をどのように図っていくかなど、活発な意見交換が行われた。

委員として参加した高校生からは「こうやって人口を増やそうとしている努力を、初めて町でやっているのを見て、とても有意義な時間を過ごせたと思いますし、こういったことがあるのを高校でも広めていきたい」といった意見をいただいた。今後は行政が持つ各種委員会に、次世代を担う中学生・高校生に積極的に参画してもらい、地域課題の共有と解決策の検討を一緒になって考えていく必要性を強く感じた。また、当日本町にゼミ合宿に来ていた立教大学の学生 13 人にも、この会議のオブザーバーとして参加していただいたが、大学生の目線で感じる西伊豆町の課題などについて発表していただき、大変貴重な意見を聞くことができた。

第1回委員会終了後、団体ごとそれぞれに会議を開催し、これまで実施してきたESDに結びつく事業を拾い出し、またそれをもとに、今後の「他団体との連携」「新たなESD事業」について話し合ってもらった。報告書の内容を見ると、主に「地元への就職を促す」「地域の絆を深める」ための取り組みや、環境教育をテーマとした活動などが提案されていた。これまで各団体が個別に行ってきた事業を、今後は関係する他団体が“つながる”ことにより、更に効果を高めることが期待できる。これらの提案を「西伊豆町ESD推進計画書」にまとめ、町民に周知しながら「町ぐるみ」でのESDの推進に取り組んでいく。

連携によるESDの取り組み

西伊豆町では本年度、ESD推進委員会による「ESD推進計画書」の作成と並行しながら、立教大学ESD研究所阿部教授の御講演を契機に、ESDに関わる様々な団体が連携し、本格的な取り組みをスタートさせた。これまで中学校・高等学校を中心に実施してきた「西豆学」を除く主な事業について紹介していく。

①地元への就職等を促す

(1)企業（豊幸漁業株式会社）×まちづくり協議会（安良里地区）

駿河湾に面した西豆地域は、古くから鰹の一本釣りや鯖・サンマなどの棒受網漁が行われ、安良里地区では最盛期に20隻以上の漁船が操業していた。地域の子どものほとんどは中学校卒業と同時に漁師として船に乗り、家族の生活を支えると同時に、地域のお祭りなどにも積極的に参加するなど、その当時の安良里地区は大変活気に満ち溢れていた。その後、漁獲高の減少や燃料費の高騰により、廃業する漁船が増え、現在では1隻が操業するのみとなったが、最近20代の乗組員が誕生する乗組員が誕生するなど、漁業に対する若者の意識に多少の変化が生じているようにも見受けられる。



サンマ船出港の様子（安良里港）



子どもたちの眼がとても輝いていたこと、また、現役の乗組員のみならず現役を退いた乗組員 OB が、参加した親子と熱心に会話する姿がとても印象的であった。

こうした中、安良里地区の地域課題解決に取り組む「安良里地区まちづくり委員会」では、静岡県内で唯一サンマ漁を行っている豊幸漁業株式会社と連携し、かつて漁業で栄えた地域の復活と、未来の漁業従事者の誕生を願って、地域の子どもたちを対象とした「サンマ船見学会」を開催した。照明に群がるサンマの映像や、



(2) 高校（松崎高校）×大学（立教大学）

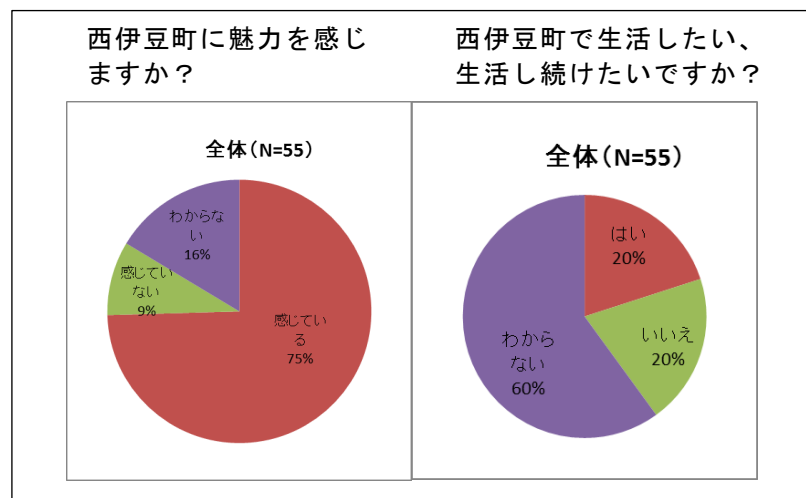
今年度、新たな試みとして、地元高校生と立教大学生との進路相談会を開催した。賀茂地域には大学がなく、地元高校生は大学ではどのように学ぶのか、大学生活はどんな感じかなどを、現役大学生から教えてもらった。また、立教大学の学生からは、都心の大学へ通う学生は都心から離れた学生よりもおしゃれに気を使う人が多いなどのユニークな情報も飛び交い、楽しい雰囲気の中で進路相談会は進んだ。



西伊豆町を始めて訪れた 1 人の大学生からは、「都会では見ることのできない満天の星空を、中学校の屋上から眺めることができて凄く感動した。夕陽も綺麗で西伊豆町をまた訪れたい。」というお話しがあったが、このような機会を作ることにより、賀茂地域に住む高校生の大学生活に対する不安を解消するだけでなく、日常生活では感じるることのできない地元の良さを再認識する機会にもなったと感じた。

(3) 行政×地域おこし協力隊

2018年1月、新成人者 55 名を対象にアンケートを実施した。その結果、約 8 割の成人者は本町に魅力を感じているものの、将来地元で生活したい、生活し続けたいと考えているのは 2 割程度であった。働く場所が少ない、収入が不安定など、将来への不安がその原因となっている。その一



方で、本町を含む下田管内の有効求人倍率は2.48倍（平成29年12月現在：全国平均1.59倍、静岡県平均1.60倍）で、深刻な労働力不足が続いており、地元企業の魅力ある職場づくりや、インターンシップなどを利用した学生へのアプローチが求められている。こうした中、本町は地元企業と連携しながら、この地域ならではの起業モデルが構築できないか検討し、国が推奨する「地域商社事業」に取り組むことにした。「地域商社事業」は、まだ知られていない農水産品や工芸品など、優れた製品の開発やサービス販路を新たに開拓することで、従来以上の収益を引き出し、そこで得られた知見や収益を生産者に還元していく事業で、現在その役割を1名の地域おこし員が担っている。その隊員は、3年間の隊員任期のうち1年を残し起業した。

他にも野生鳥獣による農産物被害が深刻化する中で、イノシシ、シカなどを捕獲、精肉加工し、地域商社事業と連携しながら首都圏に送ることを目指している隊員や、風光明媚な西伊豆の海を中心に、ドローンによる空撮映像を提供するビジネスに取り組んでいる隊員など、現在6人いる地域おこし隊員それぞれが起業を目指している。交通インフラ等の整備が進まず企業進出が難しい当町において、こうした動きが、将来子どもたちが地元で起業を志すきっかけになればと期待しているところである。



②地域の絆を深める

(1) 地域（田子地区）×NPO 法人国際ボランティア学生協会



2016年2月、本町はNPO法人国際ボランティア学生協会と「地域活性化」「防災啓発及び災害時の救援・復旧」「観光振興」などの連携に関する協定を締結した。2013年に発生した集中豪雨の際、災害ボランティアとして当町に駆けつけ、災害復旧に協力いただいたことがきっかけで交流が始まり、以来毎年約300人の大学生が全国各地から訪れ、お祭り支援や環境保全活動など、多岐にわたる活動により地域との連携を深めている。

2016年から始まった「田子地区港祭り」の支援活動では、少子高齢化により祭りの維持が難しく、年々規模を縮小せざるを得ない状況となっていたお祭りを学生の力で復活させた。担ぎ手が少なくなり、これまで役員が台車を使って移動させていたお神輿を、学生と子どもたちが一緒になって「ワッショイ」や「賽銭」の掛け声とともに、町の隅々まで担いで練り歩くようにした。このお祭りのメインは、屋台の上で行う「ばか踊り」と呼ばれる踊りで、しきたりが厳しく屋台に上がるのは地元住民のみ（昔は男性のみ）とされていた。





大学生のようなよそ者は、傍から見ることしか出来なかったが、大学生の我が故郷のお祭りのように一生懸命に取り組む姿に、祭りの実行委員会から「是非屋台に上がって踊ってほしい。」との提案があり実現した。「大学生のおかげで、祭りが昔に戻ったようだよ。」と地元の高齢者も笑顔で語っていたが、大学生と田子地区の住民との絆は年々深まり、お祭りを迎える8月、大勢の大学生が来るのを楽しみにしている町民が増えてきている。

(2)行政×まちづくり協議会（食部会）

2017年12月、東京都内の飲食店において、「“ふるさと”西伊豆町民の会」を開催した。この会は、首都圏において活躍されている本町出身者や、観光等で訪れている西伊豆ファンを対象に募集し、地元食材を使った郷土料理を囲みながら、故郷について語り合おうと企画したもので、本町の郷土料理の研究と後世への引き継ぎをテーマに日々活動している「西伊豆町まちづくり協議会食部会」が主催した。



当日は、大学生から50代までの首都圏在住者と食部会会員など、合わせて50名が参加し、本町の現状や出身地の昔話などを語り合い、大変盛り上がった。また、この会を機に首都圏在住者ネットワークを作ってほしいという要望や、定期的な開催を望む声も聞かれた。

食部会では、近年観光客に人気の高い旬の「いか」を提供できる時期に開催することで、既に次の回の準備を始めたところであるが、この会を主催したことにより活動の幅が広がり、会の活動に活気が出てきているように感じる。また、この会は首都圏在住者の故郷との距離を縮め、将来的に西伊豆町出身者のUターンのきっかけになればと願っている。

③環境教育を推進する

(1)西伊豆町まちづくり協議会（宇久須地区）×NPO 法人国際ボランティア学生協会

富士山や駿河湾が一望できる西伊豆町の景勝地「黄金崎公園」には、松の木が群生し、公園内を走る道路の先端から海岸付近にかけて、見事な松林を形成している。かつてこの松の葉は、燃料として利用されていたが、昭和30年代以降石油やガスなどの代替エネルギーの普及で需要は減少し、徐々に手入れが滞るようになり、地表に松葉や腐葉土がたまるようになった。また、2011年秋の台風15号による塩害により、松の木は生育不良に陥り、一部の松の木の葉は茶色に変色し、新芽が出ない状態となった。

宇久須地区まちづくり協議会では、農学博士の小川真さんとともに現地調査を行い、炭と肥料、菌根菌を使った土壌改良により松を再生するプロジェクトを計画したが、宇久須地区まちづくり協議会の会員だけで作業できる面積ではなく、人員確保が課題であった。

こうした時に、NPO 法人国際ボランティア学生協会との交流が始まり、黄金崎の松の再生と一緒にあって取り組む「黄金崎松の再生プロジェクト」がスタートした。2018 年 2 月の活動までに、合計 5 回の活動を行い、その間地元農業高校の生徒なども参加しながら、松の木の管理方法などについて学んだ。このプロジェクトにより、見事な松が生い茂る黄金崎の景観を再生することができた。



また、宇久須地区まちづくり協議会では、住民の高齢化により耕作されなくなった水田等を活用し、「ヤーコン」の栽培に取り組んでいる。間伐により不用となった材木を無煙炭化器により炭にし、畑に混ぜて耕作放棄地の土壌改良を行い、ヤーコンを栽培している。この活動についても、NPO 国際ボランティア学生協会が連携し、「クールタウン西伊豆」として CO2 削減、耕作放棄地の解消などソーシャルビジネスの確立を目指している。

ヤーコン栽培については、試行錯誤の上 2017 年度はこれまで最高の収穫量を得ることができた。今後は収穫したヤーコンの販路を確立させ、農業従事者の増加と、耕作放棄地の解消に取り組んでいく。

(2) 黄金崎海洋クラブ×NPO 法人国際ボランティア学生協会・地域おこし協力隊

昭和60年、自然体験を通じて青少年の健全育成を図ることを目的に、「黄金崎海洋クラブ」が発足した。宇久須、安良里地区の小学4年生から中学3年生まで、多い時には50人以上がクラブ員としてカヌー、ヨット、ローボートなどを体験した。また、田子地区では、動力船が普及するまで使用されていた櫓漕ぎ船の伝承と普及を目的に、小・中学生を対象とした櫓漕ぎ体験が行われてきた。漁業関係者のOBなどで結成された「櫓漕ぎの会」の指導のもと、毎年田子港祭りでは「櫓漕ぎ大会」が開催されるなど、こうした機会を通じて西伊豆町の子どもたちは海の自然に親しんできた。



しかし、近年指導員の高齢化と児童・生徒数の減少により、このような活動を維持していくことが困難となり、田子地区ではこれまで続けてきた「櫓漕ぎ大会」が今年から中止することとなった。西伊豆の海は地域の宝であり、将来地元の自然を語れない子供に育てほしくない、また、西伊豆町を訪れる子どもたちにも、気軽に西伊豆の海を体験してほしいという思いから、7月に指導員養成講座を開催することが決定した。第1回目として開催した「カヌーインストラクター養成講座」には、地域活性化活動で年間を通じて西伊豆町を訪れているNPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）の大学生4人と、西伊豆町地域おこし協力隊福井さんが参加し、カヌーの操船技術やロープワークを学んだ。今回参加した大学生には、今後西伊豆を訪れた時に黄金崎海洋クラブ指導者の一員と



して地元の子どもたちの指導に当たってもらう予定であるが、この趣旨に賛同し指導員を目指したいという大学生が多いと聞いており、今後も継続して実施していきたい



と考えている。また、地域おこし協力隊の福井さんは、会員の高齢化により一度は解散した「櫓漕ぎの会」を復活させ、現在海洋スポーツによるまちづくりを活動テーマとして取り組みはじめている。今年の夏、福井さんを中心とし、櫓漕ぎの指導を受ける大学生や子供たちの姿が見られることを期待したい。

今後の取り組みについて

今年度開催した「西伊豆町 ESD 推進委員会」において、各団体から ESD 推進に関する様々なご提案をいただき、ESD 推進計画書としてまとめることができた。今後はこの計画書に基づき、既に多くの団体で取り組んでいる ESD を更に推進するとともに、静岡県が実施したアンケート調査を定期的 to 実施し、西伊豆町内の小学生、中学生、高校生が西伊豆町に住み続けたいという意識を高めていきたいと思う。

また、行政、企業、区、自治会、町内会、まちづくり団体、NPO など、西伊豆町の ESD に関わる全ての個人、団体が、“つながり”を実感できる機会、場の提供に注力し、ESD による地域創生を更に進めていきたいと考えている。

(ながしま・つかさ 静岡県賀茂郡西伊豆町役場 まちづくり課主幹兼企画調整係長)